

新型コロナウイルス感染防止にご協力を（4月17日付）

政府が全国に緊急事態宣言を発令しました。新型コロナウイルス感染の収束に向かい、サッカー界も一丸となって取り組んでいく必要があると考えています。各チームにおきましても下記のご協力をお願いいたします。

- ・各チームの活動自粛
- ・交流戦や親善試合などの延期や中止 等

サッカーの試合は、敗れても次の試合を行うことができます。しかし、新型コロナウイルスとの戦いは、敗れば命を落とす可能性があります。サッカーファミリー全員が、お互いの命を、大切な人の命を守るための行動をすることをお願いいたします。

2020年4月12日に岐阜新聞に掲載をされた記事です。

集中治療医・コルビン麻衣さんが警告

「患者の命を決定づける決断を毎日迫られる」。米ニューヨーク市ブロンクスのモンテフィオーレ病院で新型コロナウイルス感染者の治療に当たる日本人の集中治療医、コルビン麻衣さん(26)が岐阜市出身の医療現場の惨状を訴えた。「うちの病院の医療従事者だけで100人以上に感染している」。共同通信の電話取材に対し「日本は手遅れになる前にニューヨークから学んでほしい」と警告した。

同病院が最初に新型コロナウイルス患者を受け入れたのは3月11日。それから1カ月、感染者は激増を続け、市内だけで9万人超、死者も5800人以上に達する。病院も「コロナの入院患者だけで490人以上」。手術は全て中止に。「46あった集中治療室(ICU)は全てコロナ用にしたが足りず、金庫室まで改装して100以上になった」

最初はどう対応したらいいかも分からなかった。初の患者受け入れから間もないころ、ある患者は平熱が続き、改善してい

NYの教訓、日本学んで



コルビン麻衣さん

るようが見えたが「少し血圧が下がったら、1時間半で熱が43度まで上がった。体温計が壊れているかと思った。過剰な免疫反応サイトカインストームが原因。間もなく亡くなった。何もできない無力感。死の間際に5分だけ許された面会に母親を呼んだが間に合わなかった。「母親は泣き崩れ、私は隣で立っているだけ。掛ける言葉もなく、トイレで二人泣いた」。

「5分間ルール」も今ではなくなり、見舞客は病院に入れない。「家族に一目も会えずに終わる人もいる」

ICUが足りず、一般病棟で待つ患者が何人もいる。「その中から1人を選ぶ問題に常に直面している。年齢や基礎疾患の有無などから生存の可能性が高い人を選ぶが、ICUに入れずそのまま亡くなる患者も多い」

患者が心肺停止になった際の判断も難しい。普段なら胸骨圧迫による蘇生措置を「やれるだけやる」が、新型コロナウイルスの患者への胸骨圧迫は「医療従事者へのリスクも高い。2分でやめるのか。5分か。その判断をしないといけない」と語る。

今や医師は「何科であろうかがコロナの患者を診ている状態。一般病棟では「1人の看護師が10人の患者を担当し、回診の3時間後に戻ったら心肺停止になっていた」という例も。患者の容体急変を知らせる院内放送はしょっちゅう鳴り響く。

「同僚が何人も感染し自分もいつ同じ目に遭つか分らない」。長男(4)と長女(1)にうつす恐れもあり、家でもマスクを着けている。「日本の人には身近に感じられないかもしれないが、家族が重症化してから悔やんでも遅い」(ニューヨーク共同＝山口 啓二)

「患者の命を毎日決断」